

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2191300991		
法人名	株式会社You More Smile		
事業所名	グループホームほのぼの		
所在地	岐阜県加茂郡東白川村越原16-1-1		
自己評価作成日	令和5年1月27日	評価結果市町村受理日	令和5年3月13日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kajigokensaku.mhlw.go.jp/21/index.php?action=kouhou_detail_022_kani=true&JigyosyoCd=2191300991-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 中部評価センター		
所在地	岐阜県関市市平賀大知洞566-1		
訪問調査日	令和5年3月1日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・利用者個々のニーズを引き出し、それに応えられるようなケアの向上に努めている。 ・職員はそれぞれの個性や特技を活かして業務を行なっている。 ・地域に根差した暮らしを提供することに努めている。 ・家庭的な雰囲気作りを大切に、常に目配り気配りを心掛けたサービスを提供している。 ・旬の食材を使った料理や郷土料理を利用者と共に作り楽しんでいる。 ・季節や行事に合わせた飾りつけや催し物の開催、誕生会などでメリハリのある生活を送っていただく。
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>利用者は当然であるが、職員もほとんどが地元の出身者であり、まさに地域密着の体制で運営されている。利用者同士が知り合いであったり、利用者と職員とが顔見知りであったりと、アットホームな雰囲気の中での支援である。それ故、家族アンケートには「安心」の声が多く寄せられている。</p> <p>利用者個々の性格か、あるいは土地柄か、利用者は一様に控え目で、自己主張や我が儘な面は見られない。「何をしたい?」、「何を食いたい?」、「どこへ行きたい?」等の職員の質問に、答えはいつも決まって「何でもいい」である。職員は対策を講じている。利用者の意思を確認するため、回答アイテムを複数提示し、利用者を選択してもらえよう工夫している。室内のレクでも、なかなか乗ってこない利用者にも、いかにして楽しんでもらえるのか、職員の力量が試されている。</p>

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「お互いに支え合いながら楽しく生活する」「家庭的な雰囲気ですら生活する」の理念を掲げ利用者が同じ地域でこれまでどおり暮らす大切さを理解している。	ホーム開設以来の変わらない理念が、玄関ホールに掲示されている。理念を理解した職員による家庭的な支援に対し、家族アンケートでは多くの感謝の声が寄せられた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナの影響で積極的な付き合いは減ったが、村のケーブルテレビに出演したり、秋の文化展に作品出展をしている。	地域行事が徐々に再開され始めた。3年ぶりに秋祭りが開催され、「持ち投げ」に利用者職員が出かけ、お祭り気分を味わった。恒例の文化展に利用者の作品を出展したが、見学は自粛した。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナの影響で老人クラブのボランティアなどの受け入れを中止して3年が経っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヵ月毎に開催している。コロナの影響で書面開催や他施設での開催をしていたが、昨春よりホーム開催に戻し利用者やホームの様子を実際見ていただいている。	コロナ下ではあるが、年間6回の運営推進会議は、書面開催の1回を除けば、残る5回は通常開催が出来ている。会議場所は、ホーム以外の「東白川村保健福祉センター」を借りることもある。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	2ヵ月毎の運営推進会議には役場担当者と包括支援センターの担当者が必ず出席している。	行政(村役場等)との連絡は、ほとんど電話で済ませており、対面で接する機会は少ない。県から支給されたコロナ支援物資(マスク、防護服等)は、町役場を通して受け取った。	ホームからの状況報告、会議メンバーからの情報収集に加え、目標達成計画の評価(進捗の確認)を実施することが期待される。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月のミーティングで「身体拘束適正委員会」の時間を作り検討事例があれば話し合い記録をしている。身体拘束よりスピーチロックの事例が多い。	身体拘束適正化委員会は、毎月の職員ミーティングの中で行われている。全職員が参加することから、周知・理解の度合いは深い。現在、直接的な身体拘束(フィジカル・ロック)の事例はない。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待の事例や報道資料等を通して職員の理解と防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護制度に関わる事例はないが今後 に備え知識の共有を図っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約、解約、改定の際は利用者や家族に理解し納得していただけるよう丁寧に説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者は日常の中で、家族は少ない面会の中で気軽に意見や要望を出していただけるような関係づくりをしている。	新型コロナウイルスの感染状況に配慮してか、家族面会はさほど多くない。ホーム内での対面面会を認めているが、「健康チェック」や「短時間」の条件を付けている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月一回のミーティングには職員が全員出席し、ケアカンファレンスと共にホームの運営についても話し合っている。	正規職員は管理者のみで、他はすべて非正規(パート)職員である。その多くが地元の村の出身で、気心が知れた集団である。運営母体が替わり、非番職員の会議出席に時間外手当が付くようになった。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	処遇改善や人事評価に関する基準や仕組みを整備し運用している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナの影響で積極的に外部の研修には参加していない。ミーティングの時間を使い内部研修の資料の提供をすることがある。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナの影響で交流は休止している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居相談の段階から本人の思いを丁寧に聴き取り信頼関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居相談の段階から家族の思いを丁寧に聴き取り信頼関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居相談の段階から本人や家族の現状について把握し適切な支援やサービスができるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	「一つ屋根の下」で暮らす者同士、馴れ合いにならぬよう「親しき仲にも礼儀あり」の対応を常に意識している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員では代わりになれない家族ならではの存在を尊重し、共に利用者を支える関係づくりを大切にしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナの影響で積極的に関係を継続することは難しいが、家族の付添いで受診に出かける時に立ち寄ることがある。	家族が付き添って通院受診し、その帰りに実家などの馴染みの場所に立ち寄ることがある。年賀状が来るが、返事を書く気力がなく、そのままになってしまうケースがある。	年賀状や手紙を受け取ったら、返事を出す仕組みを作ってほしい。利用者の記述能力の足りない部分は、職員が援助して完成させ、関係が継続するよう取り組まれない。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	現在利用者は女性のみ。村民7名、隣町から2名の構成だが、同じ地域に生まれ育ち人柄が似ているためか職員が関わる以上に利用者同士で支え合い助け合っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用終了後も直接本人や家族、または関係者を通じて関係をつなげている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	積極的に自分の意思を表出する人が少ないため一人ひとりの日常の会話や様子をみながら思いや意向を汲み取っている。	控えめな利用者が多く、積極的に自らの意思を表出する利用者は少ない。職員は、複数提示を行い、選択してもらう支援に切り替えて対応している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	小さな村のため生活歴や生活環境などが分かる情報源が豊富にあり把握しやすい。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日常の様子を記録したり申し送りをして職員間で利用者の現状を把握している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ミーティングで全職員で介護計画の見直しを行っている。訪問看護師の参加もある。家族には訪問時などで意見を伺っている。	毎月のミーティングの中でのケア・カンファレンスは、訪問看護師の来る金曜日に合わせて開催している。短期3ヶ月、長期6ヶ月の目標を設定した介護計画を作り、介護支援専門員が毎月末にモニタリングしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	一人ひとりの介護記録ファイルと共に業務日誌や申し送りノートを使い、情報を共有し実践や介護計画に反映している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	柔軟な支援や対応がいつでもできるように心がけをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	安全で豊かな暮らしが楽しめるよう地域資源を活かしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族の付添いで受診をしていただき職員と共に利用者の健康管理に協力していただいている。時には職員や訪問看護師が医師と相談し合うこともある。	村営の国保診療所の他、村外を含む複数の医療機関が利用者のかかりつけ医となっており、家族の協力で通院受診している。週に1度訪問看護師の訪問があり、医療機関との連携にも柔軟な対応がある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療連携をしている隣町の訪問看護ステーションの看護師と週一回の訪問時や電話で情報共有や相談をし、適切な医療に結びつくようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院から退院まで医療機関と密に連絡をとり情報交換やカンファレンスを行なっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居の段階からホームの特性を説明し、重度化や終末期について本人と家族の意向を聞きながら適時方向性を決めている。DNARの導入もしている。	家族からはホームでの看取りの希望が多いが、契約時にホームの方針を説明し、条件に合った場合に限ることの了解を得ている。大きな問題は、協力医の村営国保診療所が24時間365日対応が不可能なことであり、医療行為の必要なケースは退居となる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	研修やミーティングで実践力の強化に努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の消防訓練を行っている。日頃から福祉施設などの被災の報道を参考にして防災意識を高めている。	ハザードマップでは「土砂災害警戒区域」に指定されているが、避難指示が出た場合でもホームに留まることを消防と確認している。停電対策の発電機を備えており、調理機器はLPガス対応である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりに合わせた呼称、対応や言葉遣いに気をつけている。利用者も職員も大半が同村で暮らしているので個人情報の守秘義務を徹底している。	小さな村に立地することから、利用者も職員も地域住民も、お互いに顔見知りの関係が多く、プライバシー保護には神経を使っている。ミーティングで、「必要以上なことは言わない」ことを徹底している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者が自分から意思や希望を表すことが少ないため、職員が本人の気持ちを察したり選択枝を出したり自己決定する場面を作っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ホームでの大まかな一日の流れはあるが一人ひとりのペースを尊重し自分らしく暮らせるように配慮している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分なりの服の着方や着替えを職員は容認し、乱れていることがあったらさりげなく直すなどのフォローをしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一人ひとりに合わせて野菜の下ごしらえや盛り付け、食器洗いなどを分担し利用者と職員と一緒にこなしている。時には季節の料理や郷土料理、行事食を取り入れ楽しんでいる。	職員による3食手作りの食事を提供している。時節に合わせて、ほうば寿司やいも餅、恵方巻などを、利用者も加わって作っている。地域から旬の新鮮な野菜が届くが、猪の肉のお裾分けもあった。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量、水分摂取量を毎食後記録し、体調の変化や食事の様子を職員間で共有している。必要時、訪問看護師や主治医に相談している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、一人ひとりの力に合わせて口腔ケアを行っている。口腔内のトラブルがあった場合は訪問看護師や訪問歯科に相談している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンや習慣を把握し、排泄記録を参考に声かけや介助を行なっている。利用者の返答を確認するため、トイレ使用ごとに清掃と消毒を兼ねて排泄の確認を行っている。	トイレでの排泄を基本としている。3名の利用者は布パンツ着用で排泄自立であり、残る6名はリハパン着用で、声掛けやトイレ誘導、パッド交換等の支援を受けている。昼夜共にポータブルトイレを使う利用者もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	介護記録と排便チェック表を元に排便について把握をしている。必要に応じて飲食物の工夫や下剤の服用、訪問看護師や主治医に相談をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	隔日の午後に一人ずつ入浴していただいている。入浴剤を複数使って楽しんでいただいている。入浴を拒まれる方は清拭や足湯、着替えのみといった代替策をとっている。	1日置き、週に3回の入浴機会がある。2名の利用者に軽い入浴拒否があり、声掛けのタイミング等を工夫して対応している。男性職員がいないことから、異性介助の問題はない。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの過ごしたい場所が快適で安心できるばしょであるように、家具の配置や温度などを気をつけている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	一人ひとりの介護記録ファイルに最新の薬の説明書を綴じており職員全員が服薬等の情報が分かるようにしている。薬の変更時申し送りを徹底している。利用者の日常の症状の変化に気をつけている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの生活歴や得意なこと、興味のあることなどを知りそれが活かせるような場面を提供している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	コロナの影響で買い物や外食、村の行事への外出は中断したままだが、ホーム周辺の散歩や家族との受診外出、自宅への立ち寄り等は行なっている。	コロナウイルスへの感染防止に努めており、まだ利用者には感染者はいない。特に外出を自粛しており、散歩以外の外出機会は、家族と共にかかりつけ医に通院受診する程度である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ホームの支払いを気にされる方が多いが、日常にお金を所持したり使う意思が乏しい。日用品やし好品、衣類など希望されたり必要であれば、職員と一緒にいったり代わりに買っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	制限なく行なっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホームが一般住宅を改修した施設のため家庭的な雰囲気があり、利用者一人ひとりに合わせた居心地の良い空間づくりに努めている。利用者も自分が落ち着く場所を選んできえる。	大きな旧民家を改装したホームで、共有スペースも、リビング、食堂、玄関ホールがあり、目的に合わせて自在に活用できる。当日、食堂のテーブルで、ぬり絵や貼り絵をする利用者がいた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	複数でも一人でも居心地よく過ごしていただけるよう居間や食堂、縁側、廊下つきあたりの景色が見える場所にイスを設置している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居前あるいは入居後、本人や家族と「持ち物チェック表」を用いて相談しながらなじみのもの、好きなものを持ち込んでいただいている。	民家を改装したため、9つの居室は広さがまちまちである。縁側付きの8畳もあれば4畳半もある。全て洋室タイプで、フローリング仕様である。そこにベッドが据わり、テレビ等の私物が持ち込まれている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりが自分のペースで安全に安心して過ごせるように、手すりや家具の設置の工夫をしたり、場所や使用方法を表す表示を掲げている。		